写真は語る

長野市公文書館資料【昭和（戦後）】（3/3）

長 野 市 公 文 書 館

はじめに

長野市公文書館が、公文書館所蔵の資料や『長野市誌』を中心に、長野市域の歴史を市民に分かりやすく記述した「探究ながの史」の連載を『長野市民新聞』に開始したのは、平成 23 年のことでした。その後、「写真は語る」「公文書館資料が語る戦後 70 年」「公文書館資料で振り返る市町村の歩みと暮らし」と、続けてきました。

長野市域の歴史に対する理解を広く市民共通のものにしていくためには、新聞連載だけではどうしても限界があります。地域の歩みをより一層身近な出来事として受け止めていただけるよう、今回これらの記事をホームページに掲載することとしました。

「公文書館資料が語る戦後 70 年」に続き、第２弾として「写真は語る」（平成 26 年 5 月 3 日~27 年 5 月 30 日掲載）を掲載します。長野市公文書館が所蔵する写真をもとに、長野市の歩みや市民の生活、市を襲った災害などの様子について記述したものです。多くの市民の方に読んでいただけることを願っています。

No.	タ　イ　ト　ル　名	執筆専門主事	掲載年月日	頁
16	初代は善光寺から移転 -如是姫像の誕生と変遷-	西澤　安彦	2015年 1月17日	32
17	地蔵盆の日まで続く -善光寺境内の盆踊り大会-	関　秀延	2015年 2月 7日	34
18	商店街も参加し飾る -月遅れの8月に市内で七夕祭り-	関　秀延	2015年 2月21日	36
19	10ヵ村と新長野市に -合併祝う児童生徒の旗行列-	松島　耕二	2015年 3月 7日	38
20	ネオン輝く街に繁栄 -商業の中心・権堂 町の成立と変遷-	西澤　安彦	2015年 3月21日	40
21	雲上殿と地附山結ぶ -県下初の営業ロープウェイ-	松島　耕二	2015年 4月 4日	42
22	地形生かし城郭型に -大峰山展望台(大峰城)を建築-	関　秀延	2015年 4月18日	44
23	土砂30万立方メートル流出 -松代群発地震で牧内地区が地滑り-	関　秀延	2015年 5月 2日	46
24	冬季スポーツ拠点に -飯綱高原スキー場開き-	宮原　秀世	2015年 5月16日	48
25	堤防決壊や内水氾濫 -台風や豪雨で繰り返し災害-	関　秀延	2015年5月30日	50

※本稿は長野市民新聞連載「写真は語る　長野市公文書館資料」〔2014年(平成26年)5月3日～2015年(平成27年)5月30日)〕を、ホームページ掲載にあたり一部加筆・修正を加えたものです。
　なお、本稿のホームページ掲載にあたって、御協力いただきました長野市民新聞社様にお礼申し上げます。

16　初代は善光寺から移転

－如是姫像の誕生と変遷－

社寺などについて、その由来や信仰に関係した霊験などをまとめたものが「縁起」です。「善光寺縁起」も平安時代にはその原形ができていた、と考えられています。

百済（くだら）の聖明王により教典や仏像が伝えられた記事は『日本書紀』に記されています。平安時代末に成立した歴史書『扶桑略記』では、善光寺縁起の話として、天竺（てんじく＝インド）毘沙離（びしゃり）国の月蓋（がっかい）長者が釈尊の教えにしたがい礼拝すると、阿弥陀如来・観世音菩薩・勢至菩薩が現れ、その姿を急いで鋳造したのが、百済からもたらされた仏像で、それが善光寺の本尊なのである、と伝えています。

長野駅前の２代目如是姫像の除幕式（昭和 23 年 10 月 1 日）

鎌倉時代には浄土信仰とともに善光寺信仰が全国的に広がっていきます。女性の善光寺参詣の実話や伝承が記録に残されるのもこのころからです。実現しませんでしたが源頼朝の妻北条政子が善光寺参詣を願っていたこと、曽我十郎が弟・五郎と父の仇（あだ）討ちを果たして処刑された後、彼の愛人であった遊女・虎が善光寺で念仏に励んだこと、久我雅忠の娘で『とはずがたり』の作者・二条が善光寺へ参詣して百万遍の念仏に没頭したことなどで、女人往生・女人救済の寺としての善光寺がクローズアップされてきました。

鎌倉時代末から南北朝時代にかけて成立した『平家物語』の「善光寺炎上」の中で、初めて月蓋長者の娘が悪病から救われる話が語られます。つづいて成立した『源平盛衰記』で、この娘の名は如是姫であることが明らかになります。ここに善光寺信仰の大きな柱の一つである、女人往生・女人救済の象徴ともいうべき女性が、如是姫という名で登場したのです。

この如是姫が、如是姫像（銅像）として市民の前に姿を現したのは明治 41 年（1908）10 月 21 日です。善光寺本堂西側の経蔵と大勧進の間に設置され、この日に除幕式が行われました。9 月 20 日から 52 日間の日程で、城山公園一帯を会場として開催された 1 府 10 県連合共進会を記念して、東京美術学校（東京芸術大学）教授・竹内久一に依頼して制作されました。

昭和 10 年（1935）8 月 1 日、長野駅改築工事の起工式が行われました。この年 3 月、長野市は善光寺境内の如是姫像を駅前広場へ移転し、水盤を設置して常に水を噴出し、「仏都入りの善男善女にまず清らかな印象」を与えたいと、善光寺保存会との交渉を開始しています。

11 年 3 月 15 日、「仏都の玄関口としてふさわしい仏閣型建築様式を巧みに取材」したと形容された新長野駅が竣工し、4 月 1 日から御開帳も始まりました。当初は御開帳に間に合わせる予定で進められていた如是姫像の移転は、駅前広場の拡張・整備に手間取ったことや、説明の銅版の内容をめぐって折り合いがつかず、年末になってようやく決着がつき台座に据えられました。

しかし太平洋戦争が激しさを増す中で、金属回収の一環として昭和 19 年 2 月、如是姫像は軍事供出の憂き目にあい、残された台座の下には防空壕が掘られるというありさまでした。戦後の 23 年 10 月 1 日、古代インドの美人を模した 2 代目如是姫像の除幕式が行われました。作者は竹内久一の門下生・佐々木大樹、鋳造者は堺幸一（共に富山県）です。

平成 27 年 3 月 14 日、北陸新幹線長野―金沢間が開通する予定です。整備された駅前広場に如是姫像は再び姿を現しますが、女人救済、平和を願う像として、長野を訪れる多くの人々や市民をこれからも優しく見守り続けることでしょう。

17　地蔵盆の日まで続く

－善光寺境内の盆踊り大会－

昭和20年（1945）８月15日、太平洋戦争が終わると、戦争のために中止になったり、縮小化されていたさまざまな行事・祭りなどがだんだんと復活してきました。

供出のために無くなってしまった長野駅前の如是姫像が再建されたり、新しい憲法の下、新教育制度による小学校や中学校、大学、幼稚園・保育園などが設置されたりしました。一方で城山小学校の火災、蔵春閣・城山館（じょうざんかん）の焼失、裾花川の堤防決壊、インフレの進行、さらには朝鮮戦争の勃発などが、わずか５～６年のうちに起こりました。

その他にも長野商工会議所の設立、恵比寿講の復活、雲上殿の落成、平和博覧会の開催、日本三大祇園祭ともいわれる長野祇園祭の復活などがあり、昭和 26 年には不況打開のために、長野商工会議所の働きかけもあり善光寺如来渡来 1400 年記念の御開帳も開催されました。その折にインドのネール首相から白牛が贈られました。

当時、多くの市民にとって夏の一番の娯楽というと盆踊り。善光寺でも山門（三門）の南側、六地蔵前広場で盆踊り会が行われていました。盆踊りで踊られていたのは「おらが善光寺さんは　常夜灯の明かり　末世衆生の　涙を照らす」の歌詞で知られている、昭和９年に信濃毎日新聞社が募集し作られた新民謡の「信濃よいとこ」や民謡などでした。

このころの特徴は、盆踊りの期間の長さでした。盆の入りの８月13日から始まり、お盆を過ぎても続けられ、終わるのは「地蔵盆」の８月23日でした。この日は、ぬれ仏、六地蔵、仲見世の延命地蔵など境内各所の地蔵尊を巡り、子どもが健やかに育つよう祈願し、参列した子どもにはお札や御供（ごくう）のお菓子が配られました。

この盆踊りの様子を『夕刊信毎』（昭和27年８月23日）は、「善光寺で夜毎にぎやかにくりひろげられた長野市善光寺山門前の納涼盆踊り大会もいよいよ 23 日で終幕となるが、お盆過ぎとともに訪れた涼しさに踊り手人手は日増しに減った。最後を飾る〝お別れ踊り〟だけは格別人足をさそうもののフエ、タイコの音には早くも哀愁が感ぜられ、秋の近づきを告げている」と写真入りで報じています。

昭和29年７月に信濃毎日新聞社選定、長野県蓄音器商組合協賛、「善光寺参りは日本晴れ　ほんにぶらりこ　良い日和」で始まる新民謡「善光寺参り」が神楽坂はん子の歌で出されました。昭和 44 年には都はるみの歌で出され、現在まで続く盆踊りの定番となっています。

昭和 40 年代に途絶えてしまった善光寺盆踊りでしたが、善光寺本堂再建 300 年記

念の年にあたった平成 19 年（2007）８月 13 日から 15 日まで「善光寺お盆縁日」という名前で、縁日と 14 日・15 日の２日間だけの盆踊りが復活しました。善光寺近辺の商店や地区の青年部有志が屋台を出店しました。

善光寺境内では高さ 7.5m、幅５m四方の木造２階建てのやぐらを設け、夕方５時～６時 20 分は子供の部、６時 30 分～７時は浴衣姿に蓮（はす）の冠を着けた子どもたちが、お盆の精霊に献香、献花を行い導師より洒水（しゃすい）を受ける精霊会（しょうりょうえ）を開催。７時～９時は大人の部として「善光寺参り」「善光寺盆踊唄」「炭坑節」「木曽節」「箱清水音頭」、さらには東日本大震災復興祈願の「相馬盆唄」などを踊り、観光客も飛び入りして踊りの輪を大きくしています。

善光寺境内の盆踊り（昭和 26 年８月）

18　商店街も参加し飾る

ー月遅れの８月に市内で七夕祭りー

七夕では、サトイモの葉の露を集めて墨をすり、短冊に願い事を書いて青竹に飾ると習字が上達するなどと伝えられてきました。また織り姫と彦星が１年に１度再会するという話から、願い事がかなうようにといろいろな願い事を書いて、ササや竹の葉に飾ったりしました。

野菜や果物を供えたり、ナスやキュウリで牛や馬をかたどったりして供え、祖先の霊を慰めたりする地方や、七夕飾りを７日未明に海や川に流す「七夕流し」または「七夕送り」をする地方もあります。中国の風習と日本の信仰が合わさったものといわれ、奈良時代から行われて次第に日本独特の祭りになっていきました。七夕は五節句の一つで、江戸時代には庶民の間でも行われるようになり、全国的に広まっていきました。

七夕は旧暦の７月６日夕から７日に行われていましたが、新暦になってからは新暦の７月７日に行われる所と１カ月遅れの８月６日から７日に行われる所があります。長野では月遅れの８月に行われています。戦後の昭和 26 年（1951）７月７日の『夕刊信毎』には、「一足先に七夕祭り」という見出しで、長野旭幼稚園では７月 20 日から夏休みになってしまい８月７日にできないので、今日７日に七夕の歌を歌ったりして七夕祭りを行った、と報じています。

一方、昭和 22 年に設立された長野商工会議所は戦後復興のために祭りや行事の発展に取り組み、写真にあるような商店街などの「七夕まつり」が始められました。戦後いち早く長野市権堂商店街協同組合などの実行委員会が主催した「権堂七夕まつり」は昭和 23 年から始められ、五分（５％）安という大売り出しを前面に押し出し、人出は数万人といわれました。

『長野商工会議所六十年史』には「戸ごとに絢爛（けんらん）たる大七夕を飾り、その順位をきめるコンクールも行った。これが人気をよんで年とともにさかんとなり各町もこれにならってだんだんにさかんになった。26 年には商工会連合会が主催となり、商工会議所でも審査員を派遣してこれに協力し長野市の夏の名物となって現在に及んでいる」と述べられています。

大門町上商工会では、大きな青竹に短冊やくす玉などを飾りつけ、各戸前の道路に飾りました。昭和 33 年の「七夕祭り参加名簿」によると、期日は８月５、６、７の３日間で、参加店舗数は 22 店、青竹１本 120 円で計 24 本、大判色紙が計３千枚、くす玉小 10 個・中 30 個・大１個、総計 4,503 円の支払いをしています。翌 34 年、35 年は８月６、７日の２日間に行われています。

こうして始まった七夕祭りは昭和 47 年、権堂商店街協同組合が実行委員会となって「長野七夕まつり」と名称が変わり、各店が豪華な七夕飾りを並べて大勢の市民や観光客の関心を集めてきました。現在では商店のみならず幼稚園・保育園、小学校、さらには一般公募の作品も展示し、新幹線や世界遺産などをテーマにした作品や、権堂周辺で活動する作家の作品なども展示。７月末から８月７日まで行われ、長野の七夕祭りとしてにぎわいを見せています。

長野市大門町の七夕祭りの飾り(昭和 26 年 8 月)

19　10カ村と新長野市に

－合併祝う児童生徒の旗行列－

昭和28年（1953）９月、国は「町村合併促進法」を公布しました。これは新制中学校の設置・管理や自治体警察、社会福祉、保健衛生などが市町村の新しい事務とされたことで、その処理を能率的に行うために自治体を適正規模に拡大する必要から定められたものでした。

この法律を受けて長野市とその周辺の村々では本格的に合併に向けた議論が始まりました。まず長野市は古里村に合併を打診。その後、大豆島村や朝陽村・柳原村などに働きかけ、最終的に10カ村との合併を実現し、翌29年４月１日に新長野市が誕生しました。

新たに合併したのはこの４村のほかに長沼村・若槻村・浅川村・芋井村・小田切村・安茂里村で、これにより長野市の人口は約４万人増え、14 万 7,700 人となりました。このとき、真島村・青木島村・稲里村・小島田村とも合併の調整が図られましたが、実現には至りませんでした。この４村は昭和 30 年に合併し更北村となりましたが、その後、40 年 10 月に近隣の篠ノ井市や松代町などとともに長野市と合併することになります。

昭和 29 年４月の合併により長野県の市町村は６市 34 町 338 村から９市 38 町 299 村になり、全体の自治体数が減少しましたが、それから半世紀後の「平成の大合併」を経た現在の市町村数（19 市 23 町 35 村）と比べると、まさに隔世の感があります。

祝賀ムードに包まれた長野市ではさまざまな記念式典が開催されました。信濃毎日新聞（４月１日付）によると、祝賀記念の行事は１日から３日間にわたって各所で行われると報じています。１日目は午前６時の市内５カ所での打ち上げ花火を皮切りに、善光寺本堂での市政・村政物故者慰霊祭、会場を蔵春閣に移しての 10 カ村編入祝賀会、善光寺境内での芸能大会などが行われ、２日目は 15 台の花自動車が新たに合併した各地を訪問したほか、市民有志の仮装行列が中央通りを練り歩き、長野駅前では素人演芸会が開催されました。

最終日の３日目は、警察音楽隊のブラスバンドを先頭に市内の小中学生１万２千人が長野市旗と日の丸の旗を手に中央通りから城山の祝賀会場まで行進しました。ここに掲載した写真は八十二銀行本店（西後町・現長野支店）辺りのビルの屋上から写したと思われる１枚で、市民が沿道を埋め尽くす中、子どもたちの旗行列が延々と続くにぎやかな雰囲気を切り取っています。

この日は駅伝競走や神楽行列なども行われ、祝賀ムードに沸いた３日間は夜空を彩

る仕掛け花火で華やかにその幕を閉じました。信濃毎日新聞は「日本晴の下、喜びみつ」との見出しでこの晴れやかな様子を伝えています。

長野市と 10 カ村の合併を祝賀し中央通りを練り歩く旗行列（昭和 29 年 4 月 3 日）

20　ネオン輝く街に繁栄

－商業の中心･権堂 町の成立と変遷－

権堂町のアーケード通りが中央通りと接する手前の北側に往生院があります。西町に移る前の西方寺がこの地にあったといわれています。現在の善光寺本堂造営のとき、西方寺は仮本堂になっています。中世の火災の際、本尊を西方寺へ安置したことも考えられ、仮本堂を権堂と呼ぶようになったと伝えられています。また厳堂（権堂）は金堂のことで、善光寺本堂が権堂に置かれていたのではないか、という説もあります。いずれにしても、この往生院の辺りは権堂の起源の地ということがいえそうです。

江戸時代の寛文のころ（1660 年代）の地図に、はじめて権堂町という町名が登場します。東町を南に下り鐘鋳堰（かないせぎ）を渡って北国往還に並行して南下し、上後町と下後町の境で往還に通ずる道の両側に街並みができていきました。これが表権堂です。この東側に並行しているのが裏権堂で、弘化 4 年（1847）の善光寺地震の後に発達してきた街でした。

にぎわう夜の権堂通り（アーケード設置前、昭和 32 年）

宝永 4 年（1707）、善光寺の現本堂が完成し門前が整備され、参詣客や宿泊客が多くなってくると、表権堂に客を相手にした水茶屋が増えはじめました。天保期（1830 年代）になると、水茶屋は 34 軒、抱女（かかえおんな）は 238 人に達しました。通りに沿って水茶屋が立ち並び、大いににぎわっていきました。

子母沢寛の小説『国定忠治』に登場する上州（群馬県）国定村の侠客国定忠治は、人殺しなどの罪で役人に追われ、天保 13 年（1842）に関所破りをして信州へ逃れました。権堂で水茶屋を営み目明かしでもあった島田屋伊伝治は上州出身で彼の友人でしたから、国定忠治が権堂を訪れたことがあ

アーケードが設置された権堂通り(昭和 41 年)

ったかもしれません。秋葉神社境内には彼の碑が建てられています。

明治 10 年（1877)、長野県会は遊郭設置を議決し、長野では鶴賀村権堂に設置がきまり、貸座敷という名目で翌年から営業が開始されました。遊郭設置後、権堂は一時衰退しますが、明治 15 年に町芸妓（げいぎ）の営業が許可されると、芸妓置屋・割烹・酒楼が軒を連ね、再び繁盛するようになりました。大正２年(1913)には、後町から裏権堂までの道路が新設・改修され、相生町通りが開通し鶴賀遊郭まで真っすぐに東西に結ばれ、町としての整備も一段と進みました。

昭和恐慌・15 年戦争など時代の大きなうねりのなかで浮き沈みはありましたが、市内一の繁華街には変わりはありませんでした。戦後は昭和 30 年代まで、店頭装飾コンクール・照明コンクールなど時代を先取る活動にも取り組み、商業の中心地、ネオン輝く街として繁栄しました。昭和 36 年３月には県下最初のアーケードが設置され、40 年には緑町までアーケードを延長しています。

しかし昭和 40 年代以降、人口のドーナツ化現象、大型店の郊外への相次ぐ出店、商圏の長野駅周辺への南下、買い物客の交通手段の変化などの複合的な要因により、権堂町を利用する客が減少していきました。さまざまな努力が続けられ、平成 27 年（2015）２月には再開発施設「権堂イーストプラザ」の南棟がオープンしました。今後も町の復活を願って、人々の活動が重ねられていくことでしょう。

21　雲上殿と地附山結ぶ

ー県下初の営業ロープウェイー

城山公園の一角、長野市公文書館が入る長野市城山分室（元 NHK 長野放送局）は四方を見晴らす丘の上にあります。北に目を転じると、まさに箱庭のような箱清水を眼下に往生地や善光寺雲上殿、大峰山から地附山に続く善光寺背後の山並みが手に取るように見渡せます。

その地附山には今から 50 年ほど前、展望ロープウェイが運行されていました。営業期間はわずか 14 年間でしたが、ご記憶にある方もいらっしゃるのではないでしょうか。

昭和 35 年（1960）6 月、観光立市をめざす長野市は観光開発推進委員会を設置し、5 カ年計画による観光開発案を策定します。善光寺周辺や城山公園の整備、飯綱高原の開発などとともに大峰山・地附山一帯の観光開発も盛り込まれており、この案に沿って大峰山は市当局が、地附山は民間が主体となって開発に着手することになりました。

同年、地元資本により設立された長野国際観光がロープウェイ建設に着手。翌年春の善光寺御開帳と長野産業文化博覧会の開催にあわせ、雲上殿と地附山山頂（標高約 600m）を長さ 685mのロープウェイで結び、さらに地附山山頂には遊園地を造って参詣者や行楽客、家族連れなどを集客し、長野観光の目玉にしようという計画でした。

そして御開帳を間近に控えた昭和 36 年３月、県下初の営業ロープウェイといわれる「善光寺ロープウェイ」が開業します。「いいづな」「とがくし」と名付けられた 41 人乗りゴンドラ２台が運行しましたが、それまで山頂まで歩いて約 50 分かかっていたのがロープウェイだと３分半で登れるとあって好評を得ました。

展望台を備えた山頂駅は善光寺平を一望する絶好のビューポイントだったことでしょう。山頂駅に隣接した遊園地も５月３日に開園しました。さまざまなアトラクションの中でもスリル満点の飛行塔や動物園が人気の的だったといいます。

長野国際観光の計画では第２期工事としてホテル建設なども予定していましたが、それも束の間、本格的なマイカー時代が到来するなかで昭和 39 年、戸隠有料道路「バードライン」が開通し、観光の主役は飯綱や戸隠に移っていきました。通過点となった地附山では 40 年代以降、次第にロープウェイの利用者が減少し、50 年には廃止されることになったのです。

昭和 36 年 3 月 20 日にゴンドラ運転を開始した地附山山頂に向う善光寺ロープウェイ

22　地形生かし城郭型に

－大峰山展望台（大峰城）を建築－

４月５日（平成 27 年）から始まった御開帳でにぎわう善光寺の山門をくぐり、本堂前の回向柱に向かって左奥、日本忠霊殿の左肩越しに見えるのが大峰山です。山の頂上付近に白壁のお城が築かれていますが、これが大峰山展望台です。

昭和 30 年（1955）８月、長野商工会議所は長野市に対して「善光寺を中心とする観光圏確立」に関する建議書を提出しました。長野市もそれに合わせるように、34 年７月から具体的な計画立案を始め、翌年６月には観光立市を目指すための観光開発推進委員会を設置して５カ年計画による観光開発案を策定することになりました。

一方、大峰山・地附山については、すでに 34 年９月に、皇太子ご成婚を記念して二つの山を一体化した公園を造ろうという「大峰山自然公園案」を成立させていました。

計画案は、①大峰山の頂上、謙信物見の岩、池の平などに公園を新設し、遊園地・展望台・キャンプ場などを設置、②歌が丘から荒安へ抜ける約５km のドライブウェイの設置、③雲上殿の裏から物見の岩を中継し、頂上を結ぶ約１km のケーブルカーの建設など、総工費５億円にも及ぶものでした。

長野商工会議所でも観光開発計画対策特別委員会を開催し、県・市の関係者を招き県の開発計画、市の大峰山観光開発計画を聞いたりし、また市の土木課・商工観光課の参加をえて現地視察したり研究を重ねたりしながら開発の要望書を提出しました。これに対して市は、大事業であるので会議所の意見を充分に尊重していきたいと回答し、開発は、大峰山一帯は市が主体、地附山一帯は民間資本を導入した長野国際観光会社を設立して行うこととなりました。

昭和 35 年６月、第１期工事として荒安から大峰山頂まで 1,700m、幅５mの観光道路の建設が始まりました。経費削減のために自衛隊の協力を得て２カ月で終了、翌年春には池の平まで 1,400mの第２期工事も完成しました。当時は自衛隊による工事は珍しかったのですが、経費削減を狙う市と、国民に親しまれることを目指す自衛隊の意見が一致した結果でした。

工事を進めると、石臼の発見や空堀・郭など山城の遺構が確認され、山頂に城郭型の展望台建設案が浮上しました。大峰山史跡調査委員会の答申により、地形を生かして城郭型展望台を建築することとしました。

昭和 36 年 11 月 10 日に起工式が行われ、翌 37 年１月には水道局による水道敷設、中部電力による外線電気工事を経て、５月 12 日に上棟、11 月 10 日に竣工式が行われました。こうして完成した展望台は４階建て鉄筋コンクリート造で、自治省の指導も

あって大峰山展望台と呼ぶこととしました。開館は 38 年 4 月 10 日でした。

その後、長野駅から直通バスが運行され、夜間照明で市街地からよく見えることもあって、観光のシンボルとなりました。昭和 38 年度の開館日数は 244 日で、利用者は大人 3 万 6,905 人、小人 5,853 人、大人団体 3,807 人、小人団体 2,443 人で、収入は望遠鏡収入も合わせて合計 149 万 7,065 円でした。

入館者を増やすため昭和 56 年からは「大峰城チョウと自然の博物館」となり、最終的には 3,200 点のチョウの標本を展示しました。この年は約 5 万 4 千人の入館者がありました。しかしその後、60 年 7 月の地附山の大崩落により戸隠バードラインが通行できなくなり、その影響もあって入館者は激減しました。市は平成 13 年（2001）に閉鎖を決定し、19 年にはついに廃止となりました。

完成間近の大峰山展望台（大峰城）

23　土砂 30 万立方メートル流出

ー松代群発地震で牧内地区が地滑りー

昭和 40 年（1965）８月３日、埴科郡松代町（現長野市松代町）の皆神山（みなかみやま）付近を中心に、地鳴りとともに日に何度となく襲う群発地震が発生しました。地震発生から２カ月ほどたったころには「最大震度５程度で、普通の家なら心配ない。火の始末だけは冷静に」（気象庁地震課）という、せいぜい中程度の地震と思われていました。しかしその後も地震はやむことなく続き、終息宣言を出して地震対策本部を解散したのは昭和 45 年６月でした。

この松代群発地震で観測された地震の回数は、体に感じる有感地震だけでも６万回を超え、体に感じないものを含めると 70 万回を超えました。昭和 41 年４月 17 日には一日に 661 回の有感地震があり、約２分に１回地震を感じるというありさまでした。

地震が起きてからは松代町をはじめとして、11 月までに旧篠ノ井市・更北村・若穂町・川中島町・信更村・七二会村・大岡村・信州新町・鬼無里村・中条村・戸隠村（いずれも現長野市）などに地震対策本部が設置されました。老朽化した建物を使用禁止にしたり、筋交いや倒壊防止支柱で補強したり、プレハブ式建物を建設しました。中学校では防災・避難の点から女生徒のスカートを禁止し、スラックスをはくようにしました。

松代町東条牧内地区では活動がピークを迎えていた昭和 41 年９月、ついに大規模な地滑りが発生しました。５月３日に初めて区内の桑畑で亀裂を発見。９月３日には３～４ｍにわたる亀裂が３カ所見つかり、同時にこのころから湧水が観測され、以後、亀裂と湧水、さらに場所により地面の盛り上がりが観測されました。16 日には２時間に３～４ cm の地滑り現象が確認されるようになりました。

17 日に入り消防団 35 人態勢で警戒を続ける中、午前４時 30 分ころ地割れ部分の 50～60ｍにわたって地面が盛り上がり、ついに午後２時７分ころ、長さ 300ｍにわたり土砂約 30 万立方メートルが流出し、家屋全壊 11 棟という被害が発生しました。

すぐに消防団全員に招集がかかり、残された 35 世帯の家財道具を安全地帯に移したり、交通整理をしました。県知事も到着し、自衛隊への出動要請、警察と連携しての活動、県警機動隊の活動などが始まり、松代保育園で 350 人分の炊き出しの準備もしました。

18 日からは地滑り現場の湧水排除を最優先することにし、復旧作業を 500 人態勢で行うことにしました。大きな地滑りでしたが、幸いにも人命が失われることはありませんでした。

平成 18 年（2006）8 月 27 日、松代文化ホールでシンポジウム「松代群発地震の 40 年」が開かれました。牧内地区が地滑り被害を受けてから 40 年になるのを受けて、松代地震センターや信州大学大学院による研究成果を報告する会となりました。地震発生の原因について、マグマが冷え固まる際に出た炭酸ガスを含む水が松代町の地下にあり、岩盤の裂け目に入って次々とずれを引き起こして地震を発生させた、としています。厳密な意味で現在も松代群発地震は終息しているわけではなく、若い人や住民に松代群発地震とは何かを知ってほしい、と結んでいます。

松代群発地震で発生した松代町牧内地区の地滑り(昭和 41 年 9 月 17 日)

24　冬季スポーツの拠点に

－飯綱高原スキー場開き－

長野市のスキー愛好者の若者や学生は、戦前から飯綱高原大座法師池南側の入坂（仁王坂）付近一帯のスロープを利用して楽しんでいました。戦後数年間その状態が続いていましたが、次第に愛好者が増えたり、市民の行楽や観光の面からもスキー場の設置が望まれてきました。

昭和 23 年（1948）１月に長野市公民館がスタートすると、社会教育の一環として体育祭など市民の体育事業が進められるようになりました。26 年１月から２月にかけて市体育協会と公民館の主催で初めて市民参加のスキー講習会が開かれました。

昭和 40 年６月、飯綱観光開発の一環として入坂スキー場を飯綱鉱泉近くに移して飯綱高原スキー場としました。これは、飯縄山の南東中腹 20 万平方メートルにわたって初級から上級まで４コースを整備する平均斜度 16 度、標高 1,250m のスキー場で、鉱泉西側を起点として延長 900m のスキーリフト１基と、鉱泉手前の高台に 70 人収容の食堂と無料休憩室からなるスキーセンターを整備。総事業費約３千万円で着工し、12 月 27 日に竣工しました。

翌年１月 27 日の信濃毎日新聞は「昨年 12 月末にスキー場開きを行った長野市営飯綱高原スキー場は、このところ日曜日などを中心にどっとスキーヤーがおしかけ、予想外の人出でにぎわっている。当初、市は１日 200 人～300 人のスキーヤーが来ればいいと考えていたが、戸隠バードラインができて交通の便がよいことや３千万円を投入して整地、リフト、スキーセンター建設など本格的なスキー場づくりをはかったことなどがきいて、大にぎわい。日曜日や祭日などは千人～２千人のスキーヤーが訪れている」と報じています。

２月 13 日には飯綱高原スキー場の開設を記念して第 20 回市民体育祭スキー競技大会が開かれました。フランスから来日中のジャニーヌ・モンテラ選手を招いて模範滑走を披露するなどたくさんの行事が行われました。

飯綱高原スキー場はその後、昭和 42 年 12 月までには第２スキーリフトが造られたり、滑走コースも４コースとなり、飯綱高原一帯に発祥した日本最初の原始忍法「飯綱法」にちなんで「天狗飛びコース」（上級）、「雪隠れコース」（中級）、「くの一コース」（初級）、「子天狗コース」（初級）と愛称がつきました。さらにスキー場周辺に駐車場や休養施設などが設置されました。

12 月 24 日午前 10 時からはスキー場開きが行われ、午前中リフトが無料開放になりました。こうして飯綱高原スキー場は、このころから市内小中学校のスキー教室も開かれるなど長野市民の冬季スポーツ場として大きく発展しました。

リフトやコースが増設された飯綱高原スキー場のスキー場開き（昭和 42 年 12 月 24 日）

25　堤防決壊や内水氾濫

－台風や豪雨で繰り返し災害－

昭和 56 年（1981）から 60 年にかけて台風や梅雨前線に伴う豪雨により、大きな災害が連続して起こりました。とくに千曲川・犀川という大河が合流する長野市域や北信一帯では、長野市松代町をはじめ長野市若穂から飯山市にかけての各地で大きな水害に見舞われました。

56 年８月 22 日、台風 15 号と前線の影響で大量の雨が東北信地方に降り、千曲川流域では昭和 34 年以来の水害となりました。須坂市仁礼では土石流が発生し、死者・行方不明者合わせて 10 人、流出家屋 12 戸という甚大な被害を出しました。

さらに松代町では、千曲川の水位が上がったために、支流の蛭川や神田川の水門を閉じなければ千曲川の水が流入してしまうことから、やむを得ない措置として水門が閉じられました（建設省千曲川工事事務所＝当時）。その結果、蛭川・神田川の水が行き場を失い、ついに住宅 230 戸が床上・床下浸水し、住民 900 人余りが避難する事態になりました。

屋根の上に避難した人たちを船やゴムボートで救助したり、千曲川の土手に水防用ポンプを並べて排水しましたが、千曲川の水位がなかなか下がらず、何日も水門を開けることができませんでした。堤防のかさ上げ、排水機の大型化、河川の掘り下げなど多くの課題が浮上しました。

翌 57 年７月下旬には、台風 10 号の接近と前線の活発化のため、東北信では 31 日夕刻からの雨で千曲川の水位が上がり、８月２日には上田市や更埴市（現千曲市）で前年の出水を上回りました。中野市立ヶ花では 34 年８月の洪水に次ぐ戦後２番目の高い水位となりました。犀川でも明科町（現安曇野市）・長野市小市で前年を上回るなどし、千曲川流域の被害は死者４人、全半壊・流失家屋 67 戸、床上・床下浸水家屋 1,464 戸にも及びました。

１カ月後の９月 12 日に上陸した台風 18 号で降雨記録を塗り替え、千曲川では中野市立ヶ花で戦後最高水位を記録し、堤防の護岸・根固（ねがため）が流失しました。支流の樽川（木島平村から飯山市を抜け千曲川に合流）では堤防が決壊し、流域に氾濫を引き起こしました。松代町でも支流の蛭川・神田川などの水門閉鎖に伴う浸水被害をもたらしました。県全体では死傷者 37 人、全半壊家屋 16 戸、床上・床下浸水家屋 5,236 戸にもなりました。

昭和 58 年 9 月、大型で強い台風 10 号と秋雨前線の活動により、千曲川・犀川流域では 27 日朝から雨が降り続き、翌日までに降った雨は、千曲川流域や犀川上流域で 200 ミリ以上となりました。また、28 日の一日降水量は長野市で 112 ミリに達するなど各地で記録的な豪雨となりました。河川の増水は続き、ついに千曲川の本堤防が飯山市戸狩で決壊し大災害になりました。

昭和 60 年 7 月 1 日に上陸した台風 6 号は再び大雨をもたらし、千曲川・犀川・梓川流域で被害が広がりました。松代町では神田川の堤防が決壊し、水門閉鎖による浸水被害が起こりました。毎年起こる水害に、「松代公民館報」は「災害は忘れる間もなくやってくる」という見出しで、町の水害の状況を詳しく報じています。この後、神田川などの河川改修が行われるとともに、排水機場が整備されて排水能力の高い排水ポンプを設置するなどの対策が実施されました。

昭和 58 年 9 月に起きた松代町の水害の様子。神田川が氾濫したため松代中学校から松代城跡・松代小学校周辺まで被害に遭った（昭和 58 年 9 月 29 日）

おわり